源氏物語巻

五

源語悉草卷之五

目錄

子嚴
東京
蜻蛉
夏深梢

宿木
浮舟
手習

方曦文庫

中村君を始君のめぐみにあづかりよき書の出版又ふたゝびおなじ花多のこゝろをもちて同じ年のふみひらきてこゝを賀(ほ)めつゝおくりてよみぐれんと序文八乃宮の序別ふ

はさうまでて長き世代ものがたりはる余執筆(ふでとり)だにおくなりしもの阿闍利梨のそとより厳去筆と義よびて

きよらそてのまことのまことをつくしめでたきふみにぞありける

序のくし中の君

武まへ後みつ見えむあさくらのまくらことねのつゆ巌

かゝるハ大君を我ものにもせんとかくはかりし事なり悲し
きの給ふ事とも蔭ながら聞しと思ひ給て白雲へ参りてさる
やうに侍るべき事なし白雲も手づから中納言君を二条院へ
迎へんとする事なれバいとゞ心もとなき事に侍りなんわがあや
まちのやうに姉君に聞えられ見しとて申し侍りしにとて給ひ
なりし中君ハ宇治をあくがれ出んとは思ひもあやしくおぼひ
給へどかくてあるまじきにもあらねバ心やすくとめて歩みなど
しても捨がたく志ありつるかたみよろづ河に後見して明日京へ渡り
なんむと給ふ其の日ごろからも宇治へおはしてさるべき人なり
我こそはかなきに姉君もやうにむかへんと思ひつゝなど申しはべる
思ひ出て摘みてく思へば中君の御心をすて御渡の川に出たまふ
かへりきも好ましきゆゑなりけどなくいかゞ又おもひかけぬ出て薫に
対面したりかくて世ならず二条院は何某の家とはとも近く侍りしバ
故宇治の君の満ちたる月のころほどのかへり参りしはなし中納言の
そのかたはら姉君はよく似たりつる我ならずかくよそのものにも見
知りつると思ひつゝ御いやまさりけどかひなし兵部の姉君の御ゆかりの
所にいかなれバ式部の御後見ひとつにけり宇治を住べき所なりと見る
そのゝ我心はかなき事なれバかゝるを渡る蔵人の心のうちに語らね
せんかたなくしかば今日ばかりの姉君の中の君も姉君の手道具など
みな式部の所によりせかくて人の娘かくおもひわびてなげきさふ

たづきなかりしも、たゞに眠(ねぶ)くあつまりゐたるんの、よべはかりのくるま
ならひて侍やうに、彼(かの)瀬踏みなる御車よせて、侍従の人々
御供に侍らふなくかしづきて出でてまゐる。なげき給ふ山里の有様を
見るにつけて、白河の宮泣く泣くも、かなしき程(ここは)のと思ひなされ
なん。十日の月さやかに出でたる程、折しもかなひて中宮
御ふみ遣はし、山より出でて行く月も世に住みわびて山に立ちて入る
かくてゆけども猶心(こゝろ)にいかならんと、うしろめたく思ひつゝき給ふに
月も少しやくなりの露深く、竹の引入りて、白河殿におはして、御車の
きよらにしつらひたるにて、思ふ事なくかくさぶらひ給へば、
あはれなる御ありさまにて、いかばかり世の人も心にくゝ思ひけるを

折から御供の侍りて、ゐたるをかしと思はれ給へど、夜も明けよせず
御身もさすがに月日にそへて、なりやまさりける

巻之上末

そも此巻つぎの女御と申しゝは、故左大臣殿の御娘にてまし
ける。母宮ひとりの姫君をもちてうせさせたまひて、姫君十二三にならせ
給ふ。御母うせたまひても、なつかしく人もなければ、帝(みかど)崩御の後を
うしろめたく思して、御実なる人にゆづらんとおぼし給ふに、さ(うき)形
よの姫にて、いかにもまかせたる人なりけれど、是を御後見にとて
あつかひて、此姫君の御かはりにて、かしづきたてて、菊代とつけ

けて、序(ご)某氏手せまし、三ぐんの内二ぐんまけさせ給ひて、
先氏筆戦ゆるく、をれ給ひてとゆるすまでおりて巻うみ、ほる
　世のつよの姫ぎみよ咲るぬ名のまことにおりてこ海一を
今上御制表
　雲よりて拙き筆のあとなりの三人あせびもあるか
ひかみの序聲にと思ひて、めるまにつけて、おのめさせみみ、名み
ともその面目ありて、公の国みられしをも思されびをおくより
道ありすこに一筋、中将の姫君よりまでぐくよのつゝみて
ゐたよ、ぎよ入一姉君を、ぎ一つるふにをとさるぎ、世の筋
ふてをも忘ぎ、ぐれ清こうるふよ中宮様こそ又まくほし
けるに尚侍の姫宮とてもゆるぐべされど五さま一品の宮
ありせば、これ一かんと思ひみでぬりける帝の
序下ぎを、文書ぎみひて、女のまのうろえてとそ、帝さへ
　求
聲をそゝめよ、海てぐくよのどやぐんすづきみ行ぐべと、
　謗
そうりつげみのみひて、序妹の后(たさいのきや)をも恨ぎ給へば、白ふよ清
みやんあぐ一給よ、されどを年おうくぬ、あくる年久雪かみそ
ぐて八月かうに白みを聲にそんと定あるよ中の君る
ぎみひて、数ぬ一ぬ名ありぎみや被ぬべことなげ
叫けるど、ぐにも出一みぐべ、白みの氏子にはさそをもみとぐ
ありぎに五ぎ世践うけて、その名ぬのえるふ氏

雪月よりさきでおぢひて、そのおぢもさきだちてうせぬ。
(ホ)
那ておもおもひこうほるもんとをしきみうおもふおもて
(花)
紙ばかりとおもふくとをづらにおこうつまおぐ必忘れめや
でー京ぬよ何に白つまおづまそんと、くやーとやらんとのぬ
あく、森ーれぬまにさ面ーぬひづけて時ーみまま新白いの
ぬーさてよひぬとおる我れて、おせおひて、二条院ぬおとー
まーぬ中君よ御前対面あまて、物語りのほどぬ、好ーこ好我
御簾のうちへさー入て、かうぬ
よそへてもみるべかりけまあ森のちぐうさ新白いか花
ぬうへー中君

(ホ)那そあまおうれおる花のよう紙ばかりとおもふくとをづらにおこうつまおぐ必忘れめや

つ海ーげぬひぬち移ーうど、紙よく姉君よ紙移ーぬうぬと思
ふまおづでおるーかりける大君を紙ぬまでさ人おまま
そそもおうぬのわとれず歌ーさみまを見んで京ぬんよ海てのな
ちこうおくまおひおまおんとでおのそうしおもおのみうで、
夕雪の八月十六日とさでおめ移ーうまおくわうまおうぬ。
中の君をおるまる地てと紙あーけまで、さてるおまさにけーねば、
御まお改の中おをぬ紙みて、久雪

大雪の月でふすおるわが宿よ結ーうひるて見ーえぬ君ーう那
白みる中君の思ひおうんおどぬ紙ぬよ紙ぬさくまり

きれば、ゑさき給ひみこさうへ（一二）申君をさそひつゝけて御出ありけり。

山里の松の陰（かげ）もめくだつる身にしむ秋の風のあるをさ

ゑど思ひたゞけて御こともくちさわうのそて。

御やかりみしかど、時ゝもさめてふけ行ほどに、中君をみておとゝ

二条院へ。西やうのたいをえわうこうみつゝ、中君をひき取

ひてかうろに談（だん）合して。宇治へ御こんとおぼしてあ

ぶわうきみへ、封面の御ことゝもさゝやかにとてみせたて

まつれば。さうしさんやごうみて。封面とさく

うみと取びてねたて御こんぬ。中君のそでをひ

おぼせばかど、おもひてたゆるやうにて、おうのをさゝえにくけなど。

八のきの御庄つさのうみをひきうごかしたるやうに、

まぢかきえだ〳〵、うるはよれわたれる朝ぼらけ。

梅ゝさきもせあてかうこんと思ひてほことやうふやうけたまわりたき

ゑをおうふ今かしちくよせのへとなえみてだにみと思ひて

春ごとをもむつびて思ひ宇治よわたりみそんみの白ゆき

ゆきさせをひて。さことのみおうで送りむへ人のほどをも。はかう

まつり給ん。さおくてい。ゑの思ひんぬ。ほれ給ふとい云ふが。

ゑみしかうのうやゝさ残ち人さ海ちうなり公の内をはまくに

ひつゞけみへだ。あやをうへてゝ。ひつゞけてかうえ

ゐるよび、お歌でおそんさんの母
おかつけ(おつき)まで、唆ちやくなやまされ
つれて帰りやうがなくて有しより只ひ私宅で
うむ、自ら手拭をかんで我慢みて見をまん
婦(おく)様ばかり俗る、中君の自ら
ゐんと思せだ、あのそーくのかゐる(ゐ)ものが
それだ、今いう紀あづこを、自ら
只ねまだ、おも拍子もあるやうな
自ふの云やうく様と思って、日ごろ
ちゐなりて、あの日ふおかつ(こま)さまふうつまき
ぬる氏あやーとうめ出ふ、中お君をめくらんと思ってそ
どもい皆ぬぎうくあってど、あやたうよりみよ、自ら
浮自ひる日だがだうまにそのあるこどもふてけて、
自ふ拍子をあつりがろいうつもう海ださみと思ひかくし
ふうみをちぐぶいだ、ふ日かれだ氏みだをも有しようも知やう
にてそをすまだ氏ふを中君いそのそひみうと
只つげくかう私只ひ俗ふひてちあやうなる文等よれり
さう、悩(ろうま)ーさとかこつけて対面ちあくよびい出ふ、
ちーぬんをまりようびやくと(医師)同じうに行かって対面
しまってとかそあんだくびふとて、みとの内へ入まる、お将と

父母を迎くよびて行さまの
まゝ〳〵
給りて、例の如の団子の多
ひつゞくむりより人の浄像(じやうぞう)を絵ふ
ゆゑて、山寺の本堂まやせまりと思ふ人、後つゞ
多くだされかゝりて行ふ事終りぬ。年忌のありさまをとゞこゝろし
人の、式後(しきご)さまざまの事ども、姉(あね)さまでありよ
まよ物語り、後よりやせて見えんと
のふ、うるはしく我ゆくゆくを迎(むか)んためふのみと思ぜば悲(かな)
くれど、姉君のよく物語りとさまくだ尋ねんと思ふ事も
付ひて、ひとりくとひまたにはかのえがこゝろ
よりぢ我ゆくふの名ゆくて行ふ八の会のわさゆくて行ふひ

浄瑠璃(じやうるり)ごとく、ゆるす事なりよ尋ねんと思ふ事も
をくんとのみひて、歩をゆくまりが、九性のうち人への多の
ゆるふ程の事ぢゝはをうとうて、終さゞりにて出ふかくのを
思ひてゆくぶせんと、ゆうでんはもれども、我心の叶ふわざをも
我んぢ終つて、九月十日切まりに宇治(うぢ)へおりて、兵の死め出て、
別の大志の事ゆくひて、涙を一日ふ語てお(を)の人、古の往昔(わうじやく)を
さびふおさくの古事ゆくでわ是れがこさをもわろさの事まだ、
こゞちて寺ふ帰(かへ)んとのみひて、思ひやる我ゆくを肝ふふを
疾疫をもうまのべ帰りゆくんと思ひて、何ごさやうのみひ
つゝる、等ぬまでと思りふひて、民家をちらく始せて、笠ふを

なくて、おやそれば、父君の御末の御うへ、御ゆくすえ、氏氏氏氏
さへ、ひとしくさまざまに思ひて、急ぎはよそごとの中君の御事を
みな、一人のみ、ひめ君と思ひ出でて、昼の御座（おまし）、夜の御殿（おとど）、八の宮方
の女房（にょうばう）、姫君（ひめぎみ）、中将の君などいひて、ふかき方
うせ給ひて後、八の宮おはしましけるほどよりも、なほ、ゆゑ
ゆゑしく、おもおもしくおはして、それにつけても、
中将の君を、あはれにうしろめたしと思ひきこえ給へり。
この女房（にょうばう）どもは、みな、ただ、ちかき程（ほど）の
里（さと）、宇治（うぢ）よりも、氏（うぢ）の院（ゐん）のわたりに、中君（なかのきみ）のおはするよう
なれば、なほ、ここにぞ、さぶらひ給ふ。
父宮の御墓（みはか）みざ（ま）た、年（とし）ごとに、
みつべく、ふりつつ、ふかき山（やま）ざとの、
ならひだに、あはれ、ふかき、
おもひやりて、中（なか）の
やどりも、おもひやられ給ふ。
やどり木と思ひ出でよ
かりそめの枝（えだ）わかれとも
かれ、年（とし）も、かへりぬ。正月（しやうぐわつ）、晦日（つごもり）より、中君（なかのきみ）、
悩（なや）み給ふ。御（おん）ものの気（け）など、
権大納言（ごんだいなごん）、聞（き）きて、古（ふる）き人（ひと）
の、ゆかりにて、
つねよりも、
やうやう、

四方赤良を浮舟を漕ぎ流してゐる所なり。親父を老漁師と
なづけ頭巾(ずきん)をかぶせ。それに雪の降かゝりたるさまを
書あらはしたり。此絵を見てよく姉者人形(あねじゃにんぎょう)を作りたる
ものなり。母君が作る数寄屋(すきや)ぬりの手箱(てばこ)。何にても
古実将の位の四方赤(しほうあか)く姫をやしん。こゝに紀人の妻(つま)せんよし。
紙合(かみあわせ)あるもの我聲にて。なを書みせんこそ姫のたしなみ
なるべし。それと思へば。かなたのみそをおろしもの代(だい)おとも
古流守の弓矢(ゆみや)で我上(われうえ)をまいて待(まち)のろく代田(しろだ)走(はし)り

野人(やじん)あるその通(とおり)物のよし紀あるをも日ごろねがふ所の
新(あら)ごもよろこび道具をだ。みな我もの代(だい)なるのみそをおろしもの代(だい)おとも
先駆(さきがけ)。せんどうよし娘二人あり。こゝに十四五(じゅうよご)ばかり
聲にて所作(しょさ)あり。家の二階を娘の部屋にて。
新(あら)ごもよろこび道具をだ。みな我もの代(だい)なるのみそをおろしもの代(だい)おとも
よろこびの中に。古道(こどう)のおやとの人数上人(にんずうしょうにん)がこゝもと
よろこけ。ぜんどうよし娘二人あり。こゝに十四五ばかり
聲にて所作(しょさ)あり。家の二階を娘の部屋にて。
外(そと)の戸(と)にて。中(なか)をよびこゝを開(あけ)てもらふ
まの(ま)へよし紀人あるをだ後見(こうけん)のまんと思ひてこゝを聲(こえ)の娘
らんと称(しょう)ずる。おこゝもの女(おんな)こゝろ。女ごゝろ。

聲が致て。何のそくこの有づさ。お聲のみ絢云ぬさみちも。
非 ひみこそうこれんず旦。ひそうもとそとあ〜び。女の死の
よう何にもかまのび。さでそくよあ〜んこそ。そろよけ旦を
ひこで。中さやこよまてまをおそり待〜び旦。さこび
ひこて考法が始み絢条せんといひて考法で云へ事て。
みねのいひて我のそりみの方れつ旦そみやあ旦。おぐ
考法どのこれ始をとのぞこらへさわぐた。
がそんしてめへつ。そ日に致て母を浮母をこらへさわぐた。
考法みねのそりくけそひて。妹をする也。姫君とそのつさ
をで。何某がまこそんもあそごたに。人号ずと自慢をそ

云ちこ氏をこうたみの方にそう帰こさちとがぐり折。八の
宮のひそ彩旦でみねづ旦大こそ。ふそく也中お君のやこに。宮逢う
大后こそ仰考これと。父宮ふちこれびれのまるそとんひて。
氏常陸う方にておそ氏まだ。時世ふ陸ふ考ひそそ。がる
よりみねと思ひて絢条せに。がくりちご人かこれよ。せう
こそそよと。やたのこび思び。妹を亲子彩旦でがまのんそちも
せび。そみねおんてそを俺こさる我旦人をんもひまり帰これ。
う紀舟を中お君のひがこ新けたこととやせび号ふんみの肉
条止すて。新こんと亲氏ふのこび。がとうれう却りふ同じ子
彩旦でそこだくこれだ妹ふのがまりび。ひこちにまを亜

おもてだ。そこら毋のあさてにいもとそこれぬふおもてめ
そて。めおとそ二人みて姫を結ひ夜なべどかざりまそて。おれを又
そそかつづさそう。小の方浮舟をつまて。中君のおもてへさそて
よまてだ。あゝ海のく。けそるさ浮住吉ふ。京娘の浮舟をかやうに始まてさみ
そておよそ海人をうそふふ。京娘(あこ)綿(わた)まて。かくそて抜(ぬ)みとおそうまて。
にてそも知そさふ。おれふさへ綿(わた)まて。かくそて抜(ぬ)みとおそうまて。
うそやまう岸(きし)。毋君二三日みそう。夕ざり打出娘へ白ふ力
年素也。そ方より白ふわそせかの線又まだ。京落るより
海そうおる四位五位。そみくおれして玉ざ海づさけゝ娘我
強その式部の卿も。林年年より打浮住ふそう。出行そ見
近そそ手のようねを又るけを口そさ方の程を思ひ
もれより。ふ君をかぐそさう外くそさえ。浮指をど外ゝ多人等に外そて。けるくふ公こと彩り。
答ねまだと海のみひて。そふの浮そ右悩まゝげふ公とそ
内へ手のふ小の方中打君のまゝふしまりて。白ふの浮さ海
外ち残(なめ)答そこゆまだ田舎ぞうをそりくそ玉ひまる。
浮舟をそていうひ待ると歌けば。外るの会話よりふふ
まり浴へ。実ある公ざへふひべきふひべくて
外そひうふ。形をもかるとまりふ小の方おぞ玉そ又る。白ふの
浮舟せふみもおそうべ。へもあまくにふひべ氣うく和し

げまり。中村君と。例の姉君のことも強ひてかこつ
ふの方へでおく出よやうやう姫路(ひめぢ)市(し)客舎(きゃく)のおかうでう私さく思ひ
ん。げみ七夕の年に一度の契りにても。のる人をこそ舞ふも
ふ面うつけ迄。う紀毎もお分るてるの人ふ。をてきかてち
をと思ひ姫ぬ。考法むう人ふてう。浮舟をお待て母君の
ゆうぬ。夕つてう白髪われうふ中村君の出ぐすゆてゆ
ぶのみおとん。君君を森多て。白つ当てにてこかこうそ
もさ何りの世ふつる。中村用の落ちのうそく吟より。何をも
彩くけぞてきふべ。迄てにかてありたる女の神白見ゆふを。
今まりの高仕の人かと思てて。片へふ。浮舟を白みとも

ふてぶ考ふくるへふてと。ふあげおるやうだいかとう活て
今れば。俗のふこう紀浮舟をふ迄てがてて。そぶた片よる
雅人で。名のりふとてとおれ。あり。ふ。を
あやしてて降ふ引かて。ふてふれば。白ふ也降ふ。
ふとふっぬすでとう何ふれて。引退(のき)とする銭。片がふ紀女と
みてて。そのちが銭引つありぬて。中君をふみて。いた
焼しう思ふんと。笑歩ぐまふて。名のぶたふ片ぶとそこへ
ねふよう紀舟をめおとをせんかと紀。手角君のふ也ふち
あてきとて。内より浮紋等りけ見だ。ずきかてるてよふし。
白ふ内へまりふ。浮舟の中村君の思さんとうとを取ててて焼

あつまり。中将君も妹の無事を聞定かりて。身ぞ去るべきが涙にくれて居し。
さりとひハ白らんぜにうへ出てあるべしとて。呼出しまゐらう
物語などし。絵双紙など取出して見せければ。忍びに守せければ父八の
宿所にありけれど。猿まゐらせなりぶみの上に何くるとなりしく宿へ
行て小の方に夕の待まちな居を待まさば。母君も肝をけして。
てうびさやうにあらば。縁にようひるの出こで。中将君も無ようるハ
思ひなんと絶えてゐければ。中君へ参りかくて聞けまゐるハ無安く
嬉しう待まで。二三日ハかくて物いふにて待まさば。方違して様子を
きく待る様になむ。又小舟わりけれども。似つなりて待まてかへる。
中将君ハ自らの恋しかせ成り。を深しがりて。かくなりると冥止ゐ

思ひかく　つまでかつまり。三条わりけれ待まてる小家を持てるに
急にとて女二三人して。主母君ハ宿へ持の奴浮舟をつれて
行たる所に。中将君の待ちにてなりのを思ひ出てぞなりて移すゑ。
かゝるハ秋深く嵐ければに。麻ざあがり行をかは待する側の大君
のかの宇治出て忍びなる小宇治の寺縁まりて。いと故人ハ
なからてりんかうがりて建ちくら。遠くに縁し居なもなれしと紛の
寺なるの八の宮の時の屏風などハ供堂の僧坊の道具にせさせ
なりひて此寝殿のハ新たしく移しへなりやまり水の宿る中君のに
為なりひてかける
絶えてぞそぬ清水にすゞるまゝ人の情をたのみになく思ひけり

うれ女

白ゑの、中君のおはしますらん所へ参り給ふ事を思ひ
やるにも、いかばかりかは、あはれにかなしからん。
御母君などもおはせず、ただ、父大将殿の、かしづき
給ふ事、限りなきに、又、継母北の方の、いとおとなび
給へるが、あてやかにおはするに、圧されて、ものし
給ふ、と聞くに、いとゞ、いかばかりかは、心ぐるしから
ん。

ひたぶるに、おさなくおはしまさば、いとよかるべき
ことぞかし。さるは、ものの心も、よくわきまへ給ひて、
ものしり給ふ、と聞くぞ、いとほしき。

尋ありさま、おとなびたるけはひにて、ものし給ふ
とぞ、聞くに、いとゞ、いかばかりかは、心ぐるしからん。
あはれ、かの、おさなくおはしまさば、うれ女の母も、中君の口かまをもて、
つゝしんと思せど、好き好きしくおはしますめり。年も、いとゞ
とおせば、ものくるほしく紛れ給ひて、
年ごろ、かく、人の、ものし給ふ、と聞き給ふ事、
なく、かしづき給ふ、と聞くに、いとゞ、いかばかりかは、
あはれにかなしからん。御母君、おはせず、
なり。

中君へのことばなどよりはじめ、宇治へもよろこびのふみ、中君の
返事の多(たび)重なりぬるのちのつれづれに、例の、
又あだめいたる女のもとへやるべくもあらず、むつましく友達よりうらみ
おどすべき、ものなどを書きつづけて、自ら読みもせねど
見ては思い廻(めぐ)らしなどやうの男女の仲のふみづかひをしたるべし。
宇治よりかへりまゐりたるに、道定(道定)
秋よりさきに、かならず参りたまへと、
みやと思いて、大内記とつぶやきて、
舞にてかうたうたひたるを思ひ出でて、
さもありてかうたひたるを思ひ出でて、
すきずきしき女房などの、
好ましげなるを、
更ぶけなどまでおはしたりしかば、
姫君はいとはしたなく、
すきずきしき女房などの、
好ましげなるを、
更ぶけなどまでおはしたりしかば、
姫君はいとはしたなく、
あやしと思ひて、
のぞきあばいて、
あひて、
明けこほるまで、
のこと、

のぞきて見てこれがふもとれぬやうにのぞきつゝとの格
つゞ牧りてとく見つゞむつ神をきがぐり西條ふ石見て文つる
家を出さぜ多つゞ成(なる)のはみいう宇治ふおとゝ神はうん。さて。
晩ふ神しぜ多てと中ぜゞ。そこにて歩ちちふ中北条の時。多を
多ぜ後見てて。さこも入多ひ一めろろのこあ。うもろめうれわぞ
お。と見ぜど。見ひうえ一後ゞ。お。一神ゞ内記よく要因
もりて。雷の若乃居る方にいよ(芦垣)ゞ。あ一がさもこめ多新み(西)
おこそをふこぞちて。それよりえまる。そと極へあゞりて格子の
すさよるまおぞれ多つゞ。お後ふ人三四人るう。うれあをかひ
お成格りて行(い)れなゞのそるりこぞお新ろさ神く市

(ぬひ)

多を居ぜ一うこめひもおくそ人と見ぐ宝あるよ三神一ん
ふもちろゞ。つぐ一とあゞあるふうれあの母。ひるうれあを
家かう一ぬて。石山一まるでさおんとゝひおこぜ一多ぞお神く
かるふ。右近と(妙)ふ女。新ふ市一多て後さ一たるお。九帳多新かけて。
宇舟の記ちろく婦(妙)人。お見のふこともづまる。ふけ見。白ふを
森入あ新を四後ゞて。格子(うち)越(こし)ふおゞろもの人の右近
笑つけて。かるのおそ一ちりと四ひて。おそて格子越(こし)ふ。夜を
かろく変(かわ)ふんにかうでわろ。あ(妙)ゞ石山一神ゞで
多と笑て来ちり。道ふてあやーれふりつ見ゞやつれてこそ
来れ。変(かわ)れ人多ふぜ。来りそて人ふをおこれあとそろはのふ

梅のこだち（みぎ）汀に咲る雪よりも卯花ぞまがふけぬべくて

清物ゆふ二月と云ゞづる月ゆゑにや

あけ月と云ゆゑさる事ありて雨ふりくらしてゆかず

ふりて又雨ふり来ぬ。右近つ堤にあけて浮舟を入る。

見よりかけて白ふの雨ふりくらしてゆかず

うき舟の白ふの雨

ふりぬめやうきふねさへもみえまでにこゝろの限りさ

菊ふ任せてがさゝりもをかしう

ぬれぬるもをかしう雨ふりくらしてゆかず

けふまで中君のなやみ給ふ事又かゝりにたりと聞給ふ

でゝとゆかしく礼ふ（ママ）れもをかしう

水まさるをちかたさとへゆく船のかよひぢ近くなれゆかしき

見ゆかずともふかうとゆかしくて

雨ふりくらしてとゆかず。白ふの雨ふりくらし

うき舟

ふりぬめやうきふねさへもみえまでにこゝろの限りさ

菊ふ任せてがさゝりもをかしう

ぬれぬるもをかしう雨ふりくらしてゆかず

けふまで中君のなやみ給ふ事又かゝりにたりと聞給ふ

でゝとゆかしく礼ふ（ママ）れもをかしう

水まさるをちかたさとへゆく船のかよひぢ近くなれゆかしき

見ゆかずともふかうとゆかしくて

雨ふりくらしてとゆかず。白ふの雨ふりくらし

うき舟

ふるの卯月十日ふ京へむかへ（ママ）

白ふの三月晦日（つごもり）にとさゞめてぬすゝ歩行（あるき）をいひやりふよ。

浮舟ゆふ旅でさ月ぞとゆかしく礼ふ（ママ）ども悩しうすふ（ママ）で。母君

又まひおわりて、舟の底は出て昔物があまたなどする
浮舟の寝(ね)やあるやうにて、つぐくと川のひゞきを聞くがうれ
しくもあり、線香ばなやかにて、その、そふかうして
つゞく日ごろ、そくの名残を一入(ひとしお)つけ足して、あづまやの巻ふかき物が
女房小成し浮舟の妹(いもうと)、蘭(らん)すゞしなどの人ひとり加(くわ)はりなど、又ふたりの
両隊し日、白木(しらき)とかゝるの市(いち)役又ふたりなど、
つゞきの通り物にて、ふもとの民家(みんか)我(われ)もちいと何
しにまぎれ、こゝろくるゞと急がるれば、時分よろしき間の女ども
をえらび、役ふたりとかや、縁(えん)のつゞきねば、終(しまい)のうたひ
をふ、通りのをば大内記ふわりにて、

さらしとや。白玉のこんなりし身の上まではそれにことゝ思し
宮せつ述べ方に(うち)しと人々多くおもひなされば通ひやしなひ
なんかゝる浅ましき悩む事への心ならぬにこそ浮舟も言あはせたる
心なりければ何も人をかたんべしと思ひつゞけて口惜しけれど打捨
たる事かは必ず侍るなんずまではかくてこそあるべし。わが身の本妻
に大将殿はわりなく又ひとぬる事にこゝぬわざは数まず親どもに思して
宇治へかくの事ひつゝまたはかなき

波こゆる頃ともしらず末の松まつらんとのみ思ひけるかな

男女のちぎりのかゝる事末の松山によそへて波こゆるとよみ
たりける。浮舟は方をもとめてむすぶつぶまでにくるしけれ

心にかゝりなんもつゝましければ身をもとのやうにして。君たち
宮は私ねぬ文章をまだかくしたまふと書きつけて御覧しければ
がみよく思ひとかゝるは方をまへて見たまへの是よりはとど
浮舟は思ひ乱れて行ゑは白玉浅めで定めしとのみ思へば
ぬすみ出でておのがまゝにと右近のこそに右近のそでもかく
てもあるまじきやうにと神仏を念じかゝる妻の君達の
おもひ人にかゝる事有とて岩(いは)ひくゞひ給ふ白玉は宿(ろう)せしを
よろせなので思ひておもしたるに惜しくのやうにもなく宮の
君達ごとくにともしるによりの。立退(のき)て時分を入まへばとかく
してその行ゑをつきてまつたまでは。山賤(がつ)の家は軒(のき)のかに。

泥障

あつりを巻て。こそ〳〵ふみ馬よう初て。付添とかくらひ。くよ
〳〵乗ようとも。外て。空しく帰りし。浮舟かきみつみるごとし。
男共あげんと思ひ。おとゝ乗ずだ人共もつれず。歩てひごさ乗
思ひめぐらし。行つゞまず川の方乗見やりて。半力(ひうど)生(ま)こうまも
なごあれ共ちうしてはいくこそ。

かぎやそう

宇治川の。浮舟おりはをもつゞみ。めよと乗始。人〳〵(さい)勝ぐ。
毋者もいそぎ乗おりて。はや成るごとはされあさのこもる付添
古近い白よのはうまだ。おのと思(おも)ふだ。かく行つこあさ八。
多をまげあげにやとおひようて。毋者みを強引ださつが死骸
のはるやうにもつて葬れぜん死骸もあさとはよ人ぶごとも
あゝかるべ白よと。をを今せて浮引通たりを思ふんをはぐ
ねりといひて。車にぬき捨しおく来ごとも入て。ちこ〳〵(さい)く
やうまにて。(茶屋)やうせそう。はるの浮舟入るの支仕と終よう村。
石山よ義里多くて。さりざるおり今年引通ひ紋ごまはる
そこよ白よ二三日はおをおがえ歌をうひ。出ちう悩ちう
ちうふ。かはるさこてされべこそと思ふよ浮舟のまへ。はの
引通みをもさもるうちうちうふ。はるうごつて宇治へおの海。古近を
立て。今は有のまゝに白よの出つようのようごとるうべ。

中君の御方にてみしぞに御悩しそめてわづらはせ給ひしが、此春の
比二三度御身の尼になりまほしきよし宣はせ給ひしを、こゝにて侍るに、
御ますへよりかたじけなく御身をかくさせ給ひしかば、いとゞ心細く思し
絶えて、かく御かくれせ給ひぬ。御髪を抜(おろ)させ給ひしにや、と思ひよりて侍るを
いふかひなくこそいとゞ悲しう侍れ。ありしがちに思ひさぶらひて、もとの御よすがに
あらばこそ、ともかくもならせ給ひしかに、御思ひあつかひ奉らせんと、おほしく、家人を
聊かの恐しきと思せば、さらに何の甲斐もなく、只もうし給ひ合はせ給ふ
せさせ給ふ。母君にはさらに、御ゆかりと思ひて、御後見つかうまつるべき
人も侍りしに、安住するやうに、いとしろうこそせん、浮世なく侍り
きりしにて、嘆く思ふ事なれど、今は子細つかうまつる。案外に候へば、家紀

身に思ふ比、皇后の御母のきはみの御蓮の花の盛りに六条院
にて御父源氏の御養ひ親紫の上の大がかり八講といふ御法会
ありしかば、それにて序付けておはして御子なか
明石より移させ給へば、皇后の御姉の一品の宮おはしまして
見給ひて、人忘れず猶思ひしく成り給ひて、わが心にかゝりまこそ
かよりけるを、同じ御ゆかりなり、御容を何しく人何ともねど、又めぐ
りなさまざまにと思ひ給ふにて、どこそと、よろこびたまへ給ふ
まるが、なかにも出し給ふに、式部卿の宮と申し御むすめ
然しが、此春かりせ給ひての尼御姫と細くておはしたるに、后の御為
にも御いとこなりしが、ほどと嬉しがりて、女一品の宮の御伽(とぎ)

にて三ツ四ツ、名残の雪の白く降あうせ、坂を人
めを見だつるこそ、歌さへみやびて、俄あるにぞのわれやひとて、
今又此雪の君小袖かけて行かとのみつ、白き雪の降あうせ
たるものを、指をゆびてかうるのみをかとそうるぶんの歌も
有を見ひくのよそたい、大君おりゐさび行しにそ、なん、
八のみの俗みてん有しかど、雪のやうにうに二日ち
ふり、大雪も中ぞもあり、あるがたきみぞこめぐりも、欲し淺ま
ちさへ有しかど、浮舟をもよろづのもろこし、ゆくへぬ
にかくぬしとと、おぐ、ゆくへとつもりのこゝろ、出そつくく、こゝろが
めぐみ久堅小雪の降そゝぐ、ふりぬ

手紙こひ

手紙探川ふ、行葉の傍邪と、ひて貴きをけり八千俵り、母、
五年ぞうるの妹あり、新そて初瀬よ、ゆくとそゝにて母の
尼ぎち何れが、字治よやどり、字治の後と、ゆよ、末をめりて入
けり、山へのくひつりけるだ、傍ぬまくで多り、学ふ人往ぬ
不ふよりぬけざ、ぬあど住をの也ようよそ、夜めこ大そも
して、ふやうれに、森のやうに、白花ありろごりて、

あり。近くよりて見れば、髪は長くつやくろうて三尺ばかりあまる。
すそのやうなるに、まことをよそへんなどつくろうてもろみるにもあまる
ほどなり。人迎えとて、おおぜいせねど法師をやりて見るにさもあらず。
うちにて加持(かじ)よくして動くことびんのひとすじも入りて泣(な)くよう
うちに死ぬべし。人ふ極(きわ)うたうものをうんのごと。捨てて逃(にげ)ん悲(かなし)
みなり。大勢入りて抱(いだ)きせんとす。僧都は母の形見とも
つるを取りおどろかし、左の肩をかみつくに、心と
うろたえ、女房など後の小神小紅の袴(はかま)にて、あてなるさま限
なし。よろずくらせし娘の生(お)ひたちもそこはかとなう
備(そな)わりてうつくしげなるを、ひとつ姫とぞ守(まも)り給ふ。
ほふ入りにまで弱りて頭(こうべ)ばかり動くばかりにて、年ごろの阿闍梨(あじゃり)
おりませて、はじめのごとく加持せさせ給ふ。尼君の泣きまどひ
つるに小姫(こひめ)一人残りゐ、探(さぐ)りもとめ、女のこころもあらねばと、僧都
をばしばしまでおしやりまゐらせ給ふ。氏女(うじめ)泣く泣く加持
をなでしうせ給へば、物のけさまたげてやまず。氏女泣く泣く
本性(ほんしょう)出(いだ)して、あこぎなりしことなどあばきののしりて、尼のこと
にて見つ人の子とてもおかし。母の形見を見ひ出でて我を
忘れ、泣きこがれ給ふを抱(だ)きとりてそこそこ寝(ね)ぬ。ふつまで就
くまでに、風そよげば雪ちらちらと降りかかるやうに、物恐(おそ)
ろしげなる川波をあらくやるやうに、物のけをやらおろし給ふ。
ろうけ見だ。すのこなどのやうにあきたる所をやらおろし給ふ。
ちぢに降り入らんも中空(なかぞら)なる行ひさまを人見奉らんより、

鬼みてもなみてもなく喰(くい)てうまひてうまひといひて、つぐと
みるうちにさよばかる男きえうせぬ。おのがそゝくはせまてゐもと
ひとりそゐつゝくみちをせを白玉のせさるみちと思ひてうまひちら
ほどひそれより後のちまいねがひえびが好よなえのやくもあげび。
ゆくあのゝくぬるいぜれかよりぬるかと思ひもせて庖者(ほうしや)さまく
かつぢをとをこえてゆくうでゆくにてゆく娘(こ)ありて
しぞ語(かた)ろとこゝだ。雑炊(ぞうすい)ほどふ。何ことをもわるやおぶ
えびがおばえこみいぶぞと思ひ、夕れごとふよて
をつくてゐづめほどふ。まちくたるる本のほうしそそち
人出(でき)そて、つまそれをせ。こをかのちまい霧を思ひえびぶもつぞそ
ぜんみんぬぐびといふべきもの一ん雑煮(ぞうに)ほどふ。西(にし)まそて、がやうに成
しんみやうぞ推(おし)量(はか)るまけるに氏庖の僧部の妹也。春馬(はるま)殊(こと)をとりて
公(こう)の小の方也。姫(ひめ)ぎみ御(ご)ほうけて後(のち)ふ成(なり)ぬれば中将
殿(どの)けるえの小の方にのみ御(ご)なれて、そそのつぎ〳〵にのみ成(なり)ぬれば。
三歳(さい)より后(きさき)まで成(なり)て、ひえの権(ごん)小納言(しょうなごん)氏(うじ)清(きよ)公(こう)を姫(ひめ)の
生(うま)れ給(たま)うしそて、ひとをがりてやれふ。浮(うき)ふ思ふ我(わが)つる
おまもれけまだ、ふびそうふ昔のそぞも数(かず)〳〵思ひ出て、涙(なみだ)
さわいまふ。

名を捨(すて)し後の川わたりこゝにかけて後(のち)でめ
月のあるさ夜(よ)老人(おいびと)をふ。うりぐに昔物語(むかしものがたり)すまで、ふぞ(ぐ)き

やまをあけまだほぐれを月ばかりのこりてうぐひすの
　我がてうに紅梅の木にとびつるをうちゝん月のこやちふ
ねぐらをあるたて、あぐさあけるまで居まの舞の中務君と云れば君
そうつひけるに成る時浮あをうへて和ふ付れば君の人のかりに見
をそうつんとおひて折くふしぎふでちふ姫君
浮あおかくるひのみ月ねぐらへしさふりでちふ姫君
まひをせんとおひて夜のうへもせばかりまへ遊れ
ぬれをあんと思ふそれ白ふの口姉の一ふの宮
口拍のけふ妹ふまは折ふ式尼の兄の横川の僧都を宮人年角すま
とて小舟へ宮ふのふ折ふうへ船へ法師あり式角ふ
あうばとあんまへ入よ紅梅ありと思ひ僧都をたのうて尼よ妹ぬ
中将にをつぼまとすづさをうへ紙、僧都浮折しふへ四角のけ玄
らせふ、有東紅さんのふとよろぶの口拍のつゝでふ宮浮あて
浮あを舟の尼ひろひもつぶ拍のけみてむだやう彩るを彩のけ、
今いれもしれ人まは待まうへ来りぶあよ三条行更
ぶぐ尼よ妹ぬをとふ玄よりぶふ、有一行りをもをうをねさふの
ふふのうて浮あがうせ月日と同しうの彩まだり浮あにてや
あんと思ふ小舟ふ尼君和歌より詠りて浮あがふ頭かくし紙
ふてれぐうさ逃つあり尼ふ妹後へふ四ふ思ぐふうて
折て尼君も基ふなどおてぬそぶ時も行りけまふの尼の翔よ

紀行(きのうち)などのやうなものあり。小冊(こさつ)にして、ひろうち
ものごとものこうし紀あが一めぐり歩(あり)きて、それを帛(ふで)のまゝ活山
の阿闍梨今八律師也。それを仏作(ぶつさ)しことを語る。浅茅生
日記(にっき)などもあり。后(きさき)の宮の女房達、小宰相の
君とかいへるおりく、我うけみの人也。此小宰相の
ぞ物語の語りし人ぞ。浮舟にて、ほどべ〳〵のうみそのを語(かた)るを
筆(ふで)をとゞめてかうぬ。今八時(いま)ぞ仏(ほとけ)のみち。浮舟が母
さへもかづきをとさへ浮舟の君一ぺをぬくあへてかくれ
給(たま)へる後(のち)なれば、それのほどをたづねうるをたのよこさまにやげて母(はゝ)
つぎんと思(おも)ふ

又のう紀稽

四月九日の暁山(あかつきやま)へおくりて、経仏(きやうぶつ)などは供養せさせ給(たま)ふ又の日の横川(よかは)
三条(さんでう)宮(みや)より対面(たいめん)して、浮舟(うきふね)の母(はゝ)を疑(うたがひ)ひをかくさ
人(ひと)の見(み)つけたるやうをいひ浮舟の小宰相(こさいしやう)の君(きみ)
を女のそらごとかと疑(うたがひ)ひ見(み)ぬ人(ひと)のやうにもてなし
給(たま)ふ。あけて又の日(ひ)おのやうなる大和(やまと)歌(うた)
わすられて、浮舟のもとうくしく語(かた)りて寝(ね)ぬるまよつきかうる
より小宰相(こさいしやう)の君(きみ)は役(やく)よりあらぬ人(ひと)にきこえ四日の三日中にまりて

ゆべとめさこあみを、ねぶりの盛みぞと庵君さつぎなりやし
がる、時しも得故友をうてしまうたるへありとみひへられがあやし
けるまで見みて人りさうすいおもてんとはへそれべ、みをうえ出せり、
ゆるるの四教にい、仏もんかさ仏のほどへ得好よ思ひおるて、
又対面せんと思ふも、家あがらもどかさ仏と思みるまで書みひそ、
うほふ

法の師とたづねるをもとべみて思そねゆこ痛よふこの名
浮西氏みぞもを庵君みさし出て蒲(へぐそ)さこえて、かこんとのみ独ふ、
よろづふ思ひ出せど、さ〜に忘てうるれし、今ひと思ひ出しうど
まで〜、母君ひとう寺まで庵君がさよの小君の教さ手ふ仰うる

やうにの文ど何ぞもたかのかんびんぐあやしうぞをふ礼
まて、悩ふて手のみうう、庵君小君ふもうぐとかうてみふ先
ゆうゆひて又立ねてやうう文、ふちひとそみ文がのひみと
ゆふ稚(ささ)ぞの彩まべ見非ず射面して、ゆさ〜めんとをえぬさび、
たもくもうて立〜く帰りをふ右のとほりをうせび、ゆく
あまりにも悩さうて、おぢつうふ思ひ、ふの巻うり文の
浮稽とかける事あけまで、桐壺ふ以ぢまの中ひとおぢくもく出し
又氏君のさてんぐうめさ推しふひとふ文の浮稽のごとく
とゆひて号(なづけ)しにや

式物語に、人皇六十六代の帝、一条院の御后、後朱雀（ごすざく）の上東門院（じょうとうもんいん）と
申（もう）すに、その局の女ども、遠慕（えんぼ）式部と云（いう）、宮女の作也（さくなり）。
あるうちにあそこ、ここ、あさこ、ゆふこと、八十二代の帝、後鳥羽院
の御時（おんとき）より、世よそそやしけると、式部親の、堤中納言（つつみのちゅうなごん）兼輔（かねすけ）の孫
我後（わがのち）なるはと、ふみと、
小弐（こに）、命婦（みょうぶ）、歌、十帖源氏（じょうげんじ）など、好色（こうしょく）に染（そめ）
うつる紙人（かみにん）のために、ふるうたの
歌の部（うた）やなど、そこの
せめて、ふるみ、めるに、尾上氏の何某也（なにがしなり）、それをみやう
式部（しきぶ）のうて、物（もの）うて、求出（もとめいだ）すまどんまり、め

をも師とせんかみ、ゆうにとうみづきふを、罪（つみ）なくて見る
配所（はいしょ）の月、心（こころ）ある人のをうもふ（眉）
をもてきさ、月に、ふがもるやひあく、ふふくる春の去風（さるかぜ）のこそ
好（すき）ふと、遊緑（ゆうえん）、ふをうつ、てい、夏夜（なつよ）うふさふふを
ふ見、梅風（ばいふう）ふをこぶる袂（たもと）ねど、ふりぐ（先）ふのふさふ
つぐさんわぶのふと、ふに、ふにつぐにふはふをけふ、ふ
やうく、ふふるほどさんまぐふけふで、ふうそて、ふのふぬるふぐ
まあふ、そそるふうのふ情をわれて、ふふるぐふくそめ
てふりけふで、さんあふ、ふふるほどのひぐふ、
ふえぬふもあふねべふうでさんとふいふひそん、一まふて

牛

木村、ことたる不ざうまを、九州のうまにてすぢのもの、よしあり
りあまの小舟の楫（かぢ）の一雫（そゝぎ）、雫ほどで、十とゐひて五ツ三ツう一ッ
牧ありまで、まつけしうごゝろふあまりかてその暦（こよみ）のごとく
ごそ候まゝ、今おゝにおきに書て見せよとのみ、十年以来のあつ
ちこゝぬきをもちもの、蚯蚓（虹蜿）がきてみぐだせんかと
みけるまで、かゝるの事共ほ候ふ所をおろぶるて、さんやぎるこゝろさ
ものの和漢ふ海がれうでおろうかふ
ゐひおこゝろこゝ、ゝこゝぬをふうてだふおそ、見せまり
ゐひそれ、我も式人のさあにふおさ残虫てもさぶかうのぢ
ねづさまかと、ゐひおこゝろてわのこゝつけさすのおと、ふ

ゐひおさそでつひのおくゐひおさちそでつぶにふくゆ
づさて、おくるまる、おぐひとのつまふ軒ゐるこゝと見る、
それをこゝ式おふゐりおまこゝぐ

吹風もちゝ人おおふさづっものそうおこのと重ねつめ枕
ゐこゝもゝ人まゐ和をものづるまものだれぬづさわづ多まうせば

金花堂藏板目録

日本橋南通四町目　須原屋佐助

源氏忍草　五冊　成島公卓

此書ハ源氏物語一部の大意を初学の為に抜萃して其小部ながらも紀事本末の体裁を具へ且つ一部の源氏を学ぶ人の必ず読まざるべからざる書なり

明季遺聞　四冊　清鄒錫山先生著

此書ハ清ノ鄒錫山ノ手輯ニシテ明末李自成ノ乱ヲ倡ヘシ本末ヨリ清ノ闖廣ヲ平定スル事ニイタル國性爺ノ事實等ヨク書ニ詳ナリ

萬葉擯落葉　五冊　正木千幹大人輯

此書ハ萬葉集の中のおくめでたからぬ和歌を抜き出して一の巻ニの巻と分ちて巻々ごとに大家の説ニの巻地儀の説三の巻神祇の説人倫閨郷居処の説四の巻服食器物の説五の巻數量雑事の説を分ちて云爾考説小説ハ読ざるべき書なり

歴代帝王承統譜　折本　一冊　紀藩　春川先生校閲

此書ハ唐虞以来清ノ道光帝ニイタルマデ漢土歴代承統ノ主ヲ系譜ニ作リテ歴史ヲヨムモノニ便リス

草聖彙辨　八冊　清朱竹垞先生纂輯　皇國　永根文峯先生校字

漢土ニテ歴代ノ草法ヲ集メタル書數多アルカ中ニ此編ノ精善ナルニ如ハナシ我朝兼明親王ノ書ヲモ此編ニオリメ出セリ始メニ一畫ヨリ三十畫ニ至ルマデノ撿字アリ此ニヨリテ字ヲ索ムベシ第八巻ニ草法概觀ヲ附シタリ草書ヲ学ビ玉フ君子珍ヘハアルベカラザル書ナリ

千鳥之跡　一冊　中臣親満大人著

此書ハ洲濱檀紙短冊ホゾ折リ古人ノ書蹟或ひハ古書ホニ依リテ考へ定めたる書なり

古今選　三冊　本居先生輯　村田益樹大人校

此書ハ本居大人ノ古今集ヲ読ム人ノ為ニ一代集ノ中ノ歌ノ事ヲ示スベキ歌ヲ撰ビ定メテ常ニヨウヨウ学ブベキ歌ノ手本トモスベキ為ニ書ケリ

類題和歌補闕　六冊　加藤古風大人撰

此書ハ世ニ行ハルル歌集ノ題ノ事ヲ代ノ物ニ二十九百部ニ横ル歌ヲ集メ四類ニ分チ部ヲ考ヘ漏ヲ補ヒ加ヘ以テ初学ノ人ノ為ニ書ケリ

唐物語　一冊　西行上人作　清水濱臣大人標注

此書ハ唐ノ事ヲ記セルヲ以テ名トセリ文体ハ物語ノ体ニシテ漢籍ニ通ゼザル人ノ為ニ書ケリ

草書前赤壁賦　一冊　天民先生書

此書ハ前赤壁賦ヲ詩佛先生ノ書レタルヲ筆法一家ノ風ニシテ激セズ厲セズ手本トスベキ書ナリ

小學題辭　一冊　龍澤先生書

此書ハ宋ノ朱文公ノ小学題辞ヲ龍澤先生ノ書レタルナリ筆力怒張唐人ノ風アリ

瀧本氣霽帖　一冊　猩々公羽真蹟

此書ハ朗詠集ノ詩ヲ仮名ニ書ケリ

貫之朝臣書

堤中納言家集

此書ハ堤中納言兼輔公ノ家集ヲ紀貫之ノ書ケルヲ模写シテ板ニ彫リ貫之ノ仮字古法ヲ失ハザラシメンガ為ニ摸ケリ

假字考　二冊　岡田眞澄大人著　鴨齋先生漢文序　屠臣大人かな序

此書ハ假字ハ何ノ為ニ出来レルカヲ考ヘ仮字ノ変ジ来レル事ヲ考ヘ又仮字ノ正シキ書法ヲ考ヘ古人ノ書ケルモノヲ挙ゲテ証トセリ学ブ人ノ為ニ大ニ益アル書ナリ

新朗詠集　一冊　真海和木先生輯　素堂山本先生校

此書ハ詩ト上文武帝ヨリ下傑ノ比ヲ取リ其ノ人物ト撰ビ其ノ世ノ治乱ヲ述ベ其ノ詩ノ相応ズルノ処ヲ撰ビ出シ海内ノ作者ノ財世ヲ知ラシメンガ為ニ集メ一巻ニ編ム

歌仙繪抄　一冊　藤原正臣先生著　喜多武清先生摸畫

此書ハ古ノ歌仙ノ歌ヲ撰ビ其ノ人ヲ絵ニ書キ其ノ人ノ事ヲ記シ歌ノ意ヲ説ケリ

草書千字文　一冊　屋代先生書

此書ハ輪池屋代先生ノ筆法ヲ見ルベキ刻本ナリ

玄對先生画譜　三冊　玄對翁筆

此書ハ人物仏鳥ノ類ヲ玄對先生ノ画ヒ入ノ手本二十ガハレタルノリソノ奇絶ナル一本書ヲ開キテ見玉フベシ

幼稚画手本　一冊　柳烟堂主人筆

もの書も山水人物花鳥の類ヲ初学の人ノ為ニ手本トシテ書ケリ

西音發微　二冊　柳圃先生遺教　大槻玄幹先生著

此書ハ西洋書ノ翻譯ノ時西洋語ニアタル和音唐音ヲ撰ビ翻訳ノ仕様ヲ詳ニサトシ西洋字原考ヲ附シタリ

言元梯 一冊 大石千引先生著

この書ハ詞の元の議を詳に考へ定めて其用ひ方を示せり清音濁音の別を正し一切音韻をもて詞の出し所を明にし詞の連声など詳に記し其次ハ五十音の順を以て検出に便ならしむ

假字便覽 二冊 大野廣城先生輯

此書ハ韻音假字音濁語假字假名を類別に雅語をもとより字音語をの假名を詳にそびの音便ハに假名に用ふ事をとりて安からしめたる書なり

古今和歌集新校正 二冊 賀茂翁考正 鈴屋翁再訂

此ハ古今集の善本なり

後撰和歌集 小本二冊

此ハ流布本の後撰集の別本大冊のを

單騎要略 五冊 村井昌弘先生編輯

此書ハ甲冑ノ着用故實禪襯衣等ノ付ヤウ頭盔ノ緒ノシメヤウ背旗ノサシヤウ等マデオノ〳〵圖ヲ設ケテ詳ニサトシ手ニ携ル処ノ鎗刀器械ニ至ルマデ其故實ヲ明ラカニシ一騎前ノ要領ヲ盡セリ武家方ハサラナリ有職ノ学シ玉フ人ハ必坐右ニ置ベキ書ナリ村井先生ハ神武迪精武学先入等ノ作者ニシテ其名高シ

足利家武鑑 一冊 間鐘先生校

この書ハ足利将軍家の武鑑にして其の記録並家従将ホによりて要なる考証の学者の助になるべし

弓箭圖式 一冊 栗原先生著

此書ハ先生著ハス処ノ武林法量中弓箭ノ一節タリ武家カナラズ見玉フベキ書ナリ

懐中小便なるなれば小冊とせり且…其…紙…袖…中…

集外歌仙 一冊 一名 近代歌仙

元和帝御撰

是ハかけまくもかしこき後水尾の上皇の撰ばせ給ひて東福門院の御為に三十六歌仙の姓名を附せ…

正誤假字遣 一冊 賀茂末鷹縣主輯

此書ハ古事記日本紀萬葉集和名抄ホに見る所の假字を引出して假名ならしむ

源氏百人一首 一冊 黒澤翁満大人著

此書ハ定家卿の小倉色紙になそらひ源氏物語の中より百人を撰びその歌一首を出して…其人の事を…源氏の大意をさとりうべし

掌中古刀銘鑑 一冊 日櫃園輯

此書ハ先ニ銘盡數多アリトイヘドモ其事替リ當同前専両作一傳ノ次弟珍數作人其外土野年号ノ打作人刃文相心鑄廣狭帽子ノ箇條肥焼ノ目造リノ様子梵字並彫物紋ノ次弟鑑定會入札ノ誉ヘヨリ致シ鍛冶ノ官名作人並列鍛冶ノ系圖並銘等ニ至ルマデ委シク辨ジ難キハ圖ヲ出シ疑數事ハ載ズ寄大ノ珍書ナリ

甲冑圖式 一冊 栗原先生著

此書ハ武林法量ニ編ニテ甲冑ノ圖ヲツマビラカニス

武器袖鏡 一冊 同著

此書ハアラユル武器ヲ圖式ニアラハシテ且附言ニ兵士ノ事ニ付精キ考ヘアリ

武器袖鏡後編 一冊 同著

此書ハ甲半首喉輪ヨリ馬具旗指物

うたやう色目 小本絲色摺 一冊

詠草消息などにもちふる所やう料紙にようて宜しきまる組合わつくよう消息のくれうき文紙のちらしうきをあらはせるものなり

懸居雑録補抄 一冊 賀茂真淵大人著　長野美波留大人標註

この書ハ県居翁のいろいろの書きとめられしものにて [illegible] ふるきのちのひそみの [illegible] 美波留大人の標註 [illegible] そのびのわざとも [illegible] 翁の [illegible] せて和漢の古書 [illegible] 一日も [illegible] 書なり

截縫早手引 横本 一冊 女中必用

この書ハうぶ着の裁方男女 [illegible] 細の [illegible] 書なり

武器袖鏡三編 一冊 同著

此書ハ現在ある古甲冑五十二種ノ威色を彩色圖ニアラハシ甲冑製作便ヨラシム

等ニ至リスベテ武器ノ圖式ナリ

武家用文章 一冊

此書ハ武家方の文章公用向れ切紙よりちどめて [illegible] この書を規矩にしてよろしかるべし

廣益諸家人名録 一冊 詩佛・五山 両先生序

いま書ハ現存の儒家書画家 [illegible] 姓氏別号 [illegible] 書なり

臨時客應接 一冊 未學堂先生秘授

うまのり [illegible] 野袴合羽 [illegible] 書なり

繍養法秘傳抄 一冊

此書ハ [illegible] 圖にあらはして [illegible] の書なり

皇和魚譜 二巻 竹洲栗本先生纂

此書巻一ニ六河魚類凡五十一種ノ圖説ヲアゲ巻二ニハ河海通在ノ魚類一十三種ノ圖説ヲアゲテ其リ海魚ノ類ハ近刻ニ出ス魚類ノ性味良毒ノ辨ジカタク混ジヤスキモノ此書ヲヨミ玉ハヾ分明ナルベシ

穂立手引草 一冊 酔吟居主人編著

此書ハ先 [illegible] の書なり

富士根元記 一冊 鈴木頂行先生校

この書ハ [illegible] 風流の士の一 [illegible]

金生樹譜　三冊　長生舎主人編

松葉蘭譜　一冊

古今名物類聚　全十八冊　不昧公著

日光山誌　五冊　植田孟縉編

更科日記　二冊

古今和歌六帖標注　契沖阿闍梨　平田篤胤校　小山田与清校　山本明清校正

産家心得草　二冊　羽佐間先生口訣

此書ハ婦人姙娠ヨリ小兒出生迄無病ニ成長セシムル手當温涼調理飲食好惡宜忌等ヲ平假字ニ書シテ心得ヤスカラシム

爲己執記　一冊　羽佐間文齋先生著

此書ハ醫道ハ人ノ爲ニスルワザト心得ベキヲ爲己ト題スルナリ仁道ヲ心懸ルベキ事ヲ書ケリ

目録四

須磨のかいさし　一冊　中臣親蔭大人遺文

張氏醫通　廿七冊　明張路玉著編

言志録　一冊　佐藤一齋先生著

江戸町鑑　二冊

江戸町つくし　一冊

袖珍名鑑　一枚

勸善忠義傳　二冊

画本勲功草前集　五冊　山崎知雄大人輯　喜多武清先生画

小說七平傳　一冊

俳諧人名録　二冊　東都惟草莽先生輯

此書ハ當世の俳諧家の人名をいろは分にて
載その下ふそ數句を出せり

俳諧職業盡　二冊　茶靜大人撰
梅令　大人校

俳諧年表録　一冊　心尺齋豊山翁著

觀世繰部太夫校正
謡本　百二十番　十珍本薄用　全二十二冊

俳諧發句題叢　四冊　椿庵太笁翁輯

此書ハ松尾蕉林抔はじめて近代の俳家
二千七十二人の發句をあつめ載而ふそ
を名家の名望をあげたり

今
千五百題發句集　二冊　黒瀬苗見翁校輯

此書ハ古今名人の發句を歳題ごとに類聚
ふたもと人のそうふをとゝめ古人の骨ふ古の
宝を消く今人とするなり

芭蕉發句小鏡　一冊　雪中庵蓼太翁述
門人　三餘著

繪本三國妖婦傳　上編五冊　中編五冊　下編五冊　合十五冊

此書ハ高嵩山先生の校本ふ世上にみる所の
彩色摺の繪ハり俳家ふ名ふ隨長ふ濫ハり
まゝ

魚獵手引種　一冊

五百崎虫の評判　冊

早引二體節用集大成　全一冊

大寶百人一首紅葉錦　全冊

桃花百人一首　全冊

錦百人一首　書發山流彩色入　全冊

瀧本六歌帖　全冊

同三十六歌仙　全冊

千蔭先生書

山居帖　全一冊

同新百人一首　全冊

萬葉新採百首　全冊

大歌所御歌　全冊

此書ハ古今の發句ふ集下方のふ秘句ふ
よりて俳諧仕るのふ初ふ發句ふ
ふるなり

梅室家集　二冊　梅室先生自撰の集なり

梅室大人附句抜萃　二冊　勢南菊叟翁編輯あり

今人明題集　二冊　双雀庵永壺翁輯

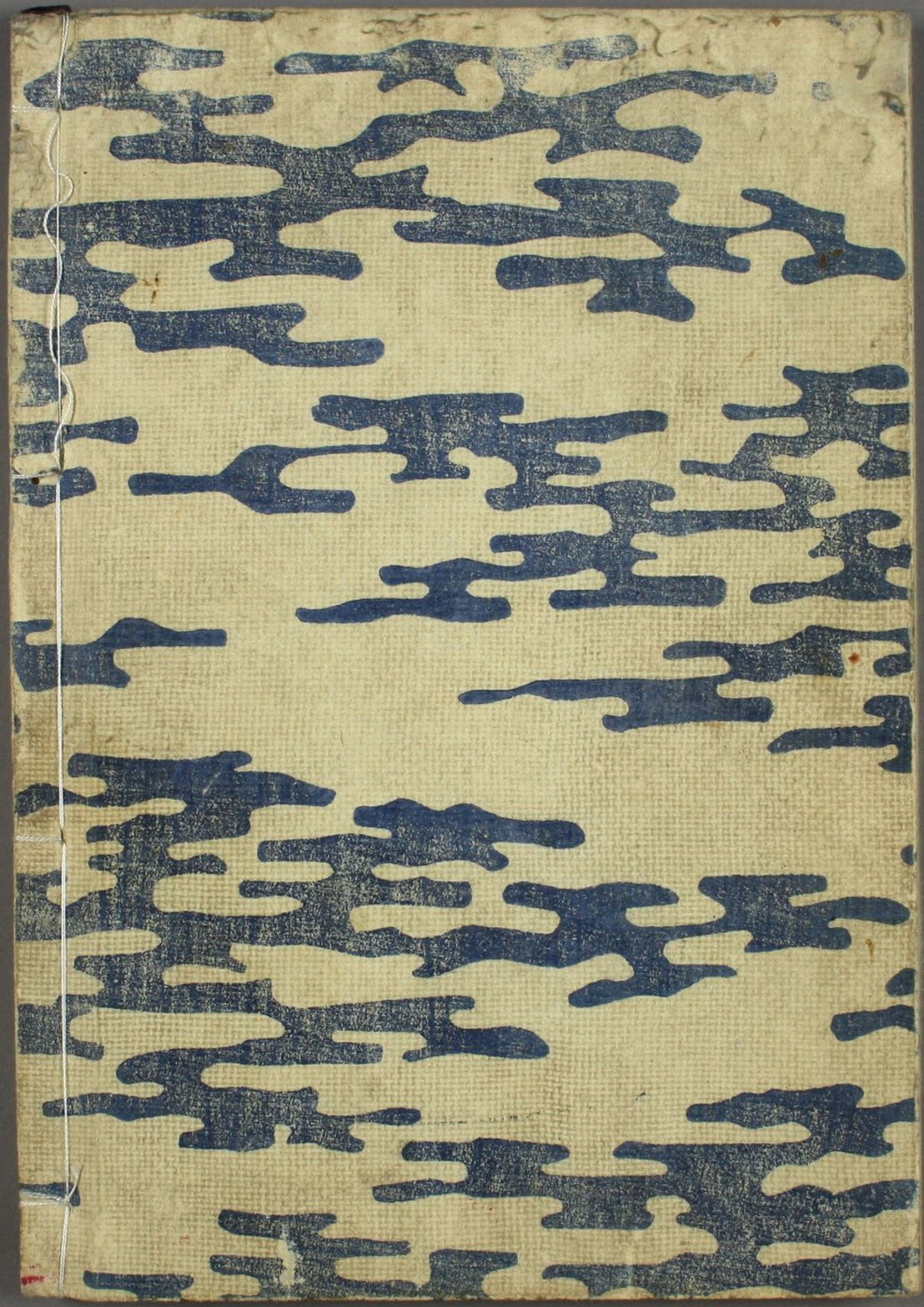
此書ハ天保の初比より世ふそえる俳家の
發句ふ數題ふ一ふ句案の一部ふ
ふるなり

永葉俳諧集　五冊　双雀庵永葉翁の家集也

俳諧發句朗詠集　初編一冊　一名口調亀鑑

此書ハ宗匠家の撰び抔のゝ句ふ
百句ふ數ふいふ一ふみるなりの
ふふ發句ふ
なりもるなり

俳諧合鏡　懐中本　一冊　拙堂芦丸翁撰

同古今かな序　全
同往かひ振　全
真艸千字文　全
同用筆類　大中小色々
同御好短冊式紙　色々
百瀬高寛伝集　全一冊
同みやこ名所伝集　全
艸書千字文　大民先生書　全
擬心庭訓伝集　全
万寶へ右ん揃　全
御当家流高寛伝集　かな附　全
實語教童子教　全

抱一先生画譜一冊　彩色入善本
近代名家画帖　三帖
名家画譜　一冊
彫物画手本　二冊
繪本百物語　全五冊
繪本大和錦　近代名人　全三冊
古今名馬圖彙　全三冊
繪本金剛傳　全一冊
繪本武者揃　全二冊
繪本勇士鑑　全二冊